一億円の価値

ドーナツ教開祖　安藤ナツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
一億円の価値

【Ｎコード】
Ｎ７１１１Ｍ

【作者名】
ドーナツ教開祖　安藤ナツ

【あらすじ】
あなたは、一億円のためなら何ができますか？
千葉春永のある一日のお話。

（前書き）

一億円って、冗談みたいな数字ですよね？
そんな話です。

千葉春永は、十九歳の地元でそれなりに名の通った工場で働く青年である。
ギャンブルはしない。酒もたばこも当然しない。
誠実とまでいかなくても、周りの人間に好かれる、好青年であった。
そんな彼は今、平日の昼間だというのに工場にもいかず、街中をうろついていた。彼が重い足取りで目指すのは、可愛い犬のコマーシャルで有名になった消費者金融。
千葉は今、金を必要としている。その額は、一千万円。
この金額が多いか少ないかの判断は各々に任せるとして、千葉にとっては逆立ちしても届かない金額だった。
実に年収の五倍近く。どんなに節約しても、千葉が一千万円貯めるには、あと十年以上必要だろう。
勿論、十年待つ余裕は千葉にはない。

「あと、十日か……」

タイムリミットを、ため息交じりに、千葉が呟く。
手持ちの金額は百万と少し。他に孤児院の先輩たちかが集めた二百万。合計三百万を、後十日で一千万円。十年を十日に短縮する方法など、知る由もない。が、

「あきらめるな。ぐっさんのためだからな、俺！」

自らを鼓舞して、千葉は消費者金融の店舗があるビルへと上がっていった。

結果は、惨敗だった。一千万どころか、年齢確認で弾かれてしまった。まさか、二十歳以上でないと金を借りられないとなんて予想外だった。事前に調べろよ！　過去の自分を殴りたい衝動に駆られたが、そんなことができるなら一千万円ごときで苦労もしないか。

とぼとぼと肩を落として、千葉はだらだたと足を動かす。幼少から住む町を歩く足に迷いはなく、違うことを考えていても足だけは勝手に動いていた。

兎に角、ぐっさんのためにも、一千万がどうしても必要。それだけを考えていた。

千葉には、両親がいない。勿論生物学的な両親はいるのだろうが、見たこともない。千葉は捨て子だった。何故、自分が捨てられたのか。千葉は知らない。知る由もないし、知りたくもない。

そんな千葉が親と認めるのが、孤児院の院長であるぐっさんだった。

千葉を拾ったのもぐっさんだったし、春に拾ったから春永という安直な名前えをつけたのもぐっさんだった。

父であり、母である、たった一人きりの両親だった。

その親が困っているのだから、助ける。千葉が必死になるのは。それだけの動機だった。

「なんか、あの本屋で万引きした時と同じ気持ちだ」

そういえば、前もこんなことがあったなと、千葉はふと五年ほど前のことを思い出した。

中学生だった千葉は、一度だけ駅前の古い個人経営の本屋で万引きをしたことがあった。それだけのために、千葉は何日も本屋に通い続け、計画を練りに練った。獲物は高そうな表紙の図鑑で、寝ている若い店主の隙をついて一冊だけだが万引きは簡単に成功した。一冊だけで一万円以上するそれを古本屋に売り、自分の小遣いと合

わせて、当時流行っていた時計を買った。ぐっさんの時計はボロボロで、きっと喜ぶだろうと思ったのだ。

だが、小遣の金額を把握していたぐっさんはすぐに不信に思い、千葉を問い詰めた。あまりの剣幕に正直に話すと、手加減なしにぶん殴られ、鼻血を出したまま、本屋に謝りに行った。『へ？　そうなの。知らんかった。そんなに図鑑ほしかったのか坊主。じゃあ、やるよ』鼻血を流す千葉と、必死に謝るぐっさんを見て、店主は興味なさそうに全十二巻の図鑑をくれたのもよく覚えている。あの店は、何故か何年たっても潰れない。

懐かしい、思い出だった。

あの時も、ぐっさんのためにと思って失敗した。

今回も、ぐっさんのためにと思って行動している。借金までしようとしている。

これは、正しいことなのかどうなのか。五年たっても、金に悩まされるなんて、やっぱり世の中金だと、千葉は思った。

「しかたない。中学の友達をあたってみるか」

千里の道も何とやら。空元気を出して、千葉は走り始めた。

結果は、やはり惨敗だった。

公園のベンチに座って、千葉はため息をつく。

「まあ、俺だって中学の同級生に『金貸して』なんて言われたらすぐには貸せねーよ？　でも、もう少し集まると思ったんだがな」

貸してくれた人間に文句をつけるわけではないが、一日歩き回っても、一千万には到底届かなかった。昔万引きした本屋の店主は、千葉の顔を一目見ると、何も言わずに百科事典を七冊もくれた。お

そらく、これが一番の収穫だった。本屋の店主と話していた女子高生からもらった餡ドーナッツをほおばりながら、夕日を無為にながめた。

晴れ空すら、憎らしくなり「金でも降って来いよ」と、小学生みたいな台詞が口をついた。

馬鹿馬鹿しい。ドーナツを口に丸めて放り込むと、千葉は今日何回目かになるため息をついた。

「お金がご入り用ですか？」

突然。千葉の鼓膜を、そんな声が震わせた。空耳と思うほど、小さな声だったが、すぐに聞き間違いでないことがわかった。

「ならば貴方は運がいい！　私がご融資させていただきましょう」

高級そうなブラックスーツに、シルクハット。右手にはステッキ、左手にはアタッシュケース。そんなイギリス紳士らしき格好の男が目の前で喋っているのだから、空耳と思いたい願望が、千葉の耳を遠くしていてもおかしくはないだろう。

「結構です。自分でどうにかしますんで」

颯爽と立ち上がると、さわやかに微笑んで、千葉は公園の出入り口目指して走った。

過去の経験から言うと、変わった格好の人間に関わって得をしたことがない。特に、袴とギターケース。もしくは学ランと銀髪の人間には注意が必要だ。

「そんなこと言わずに！　お話だけでもどうですか！」

紳士男は、陸上選手のような美しいフォームで千葉を負う。とても手にステッキやアタッシュケースを持っている人間の動きではなかった。ステッキは何の為に持っているのだろうか？

「捕まえましたよ」

追い駆けっこは十秒も続かずに、紳士の勝利という形で終わった。体力に自信があった千葉は、コスプレみたいなオッサンに負けたことに割と深いショックを受けたが、「まず、これを見てください」という台詞と共に開かれたアタッシュケースの中身を見て、すぐにそんなショックは吹き飛んだ。

「一億円あります」

アタッシュケースの中身は、一杯の諭吉さん……いや諭吉様……諭吉伯爵だった。

「これを貴方に差し上げたい。私はお金には困っていませんが、暇に潰されるのではと、それだけが恐怖なのです」

「本当にくれるんですか？」

小学生が聞いても『お前、騙されてるよ！』と突っ込まれそうな状況だが、千葉は思いっきり釣り針に食いついた。

金の魔力、恐るべし。

「勿論。ただし、条件が二つあります」

「条件？」

紳士の台詞に、思わず千葉が身構える。それはそうだ、一億なんて大金を唯でくれるわけがない。限定じゃんけんや、鉄骨を渡った

りしても、到底貰えない額なのだから。
身構える千葉を見て、紳士はゆっくりと微笑んだ。
「簡単です。まずは、貴方がお金を必要にしている理由をお聞きしたい」
あまりに簡単な内容に、千葉は不思議そうに首をひねる。
「それだけ？」
「はい。一つ目ははそれだけです。二つ目の内容は、理由を聞いてからせつめいします。聞いた後に、拒否していただいても結構です。その代り、報酬は出ませんが」
「なんでそんなことを訊くんですか？」
「私は、暇人でね。他人と言う本を読むのが大好きなんですよ。それが不幸話とかなら最高ですが」
いい趣味してる。千葉は心の中で呟く。そして、この狂人の話に乗ることにした。途中でやめてもいいと言っているし、何を賭けるわけでもない。もし貰えなくても、別段怒る話でもない。マイナスはないのだから、別に問題ないだろう。そういう判断だった。
「じゃあ、話します。内容で落とされたりしませんよね？」
「はい。嘘でもオッケーです」
本当に狂ってるオッサンだ。と考えたが、すぐに否定する。それに乗る自分も大概な狂人だ。
「恩人……ってか親父じゃあなくて、俺を育ててくれた孤児院の先生のために必要なんだよ。俺は学がないからわからないけど、友達の借金を背負っちまったんだってさ」

「連帯保証人という奴でしょうか？」
「たぶんそれそれ。で、何もしてないぐっさんが……先生のことな？　ぐっさんが一千万の借金を負っちまったんだ。払えなきゃ、孤児院は売りに出され、一七人いる俺の弟達はバラバラに暮らすことになっちまうんだ。家族は一緒にいるべきだろ？　理由はそんだけ」
「素晴らしい！」

ぶっきらぼうに言った短い千葉の説明を聴いて、極上の料理を前にしたかのように、紳士は口から溢れてくる涎を拭いながら叫ぶ！
「いいですね。いいですね。家族愛！　素晴らしい！　そんな貴方に二つ目のお願いです」

そう言ってポケットから取り出したのは、一つの小さなケース。指輪を入れるようなそれは、妙な緊張感を持っていた。
そのケースを紳士が叩くと、ケースが開き、真っ赤なボタンが見えた。

「これを押してください。そうすれば差し上げましょう、一億円」
「じゃあ、さっそく」

いったいどんな無理難題が飛び出すことかとビビッていた千葉だが、拍子抜けする内容に、安堵の息を漏らす。
迷いなく、千葉はスイッチを押そうと腕を伸ばす。が、まっすぐに伸びていった千葉の腕はすぐに紳士の声で止まった。

「ただし、このボタンを押すと、人が死にます」紳士の顔が、邪悪に歪む。
「安心してください。貴方は死にません。貴方の世界は守られます。死ぬのは、貴方とは一切合財微塵も関係ない、会ったことも話した

ことも見たことすらない他人です。ですから、ご安心を。貴方は一切困りません」

低い地獄のような紳士の声を聴いて、理屈でなく、千葉はこの言葉が本物だと理解した。厄介な服装の人間に会った時に感じる、嫌な気配に全身の毛孔が開いて、背筋が凍ったように冷たくなる。

そんな千葉を見て、紳士の瞳は、深く深く瞳を輝かせる。何がおかしいのか、笑いながら震える千葉にボタンを握らせる。

「さあ。それを押したら一億円です？　どうします？　五分間差し上げましょう。その間に押せたのなら、だれか一人を殺せたのなら、一億円はあなたのものです」

紳士の甘い問いかけに、千葉は間をおかず答えた。

「五分？　必要ないよ」

迷いなく断言する千葉に、紳士は隠しきれない喜びに、身体を震わした。

「いいですね！　いいですね！　愛する人のために、見ず知らずの関係ない人間を殺す。しかも迷い抜きに！　貴方の愛情には感服です！　さあ、ボタンを……

「押さない。俺は、ボタンを押さない」

饒舌に語る紳士にボタンを投げ返し、千葉は力強く言い切った。

紳士は、何を言っているかわからないと、首をきれいな疑問符に傾げた。

「これが、俺の両親を殺すんだったら、押したんだけど、無関係の

人間なら殺せない」
「どういう意味です？」
「ぐっさんと俺の関係なんて、本来は微塵もないんだ。一切合財無関係の他人だったんだ。だから、押せないよ」
「なるほど」

千葉の答えに、紳士はいやらしく笑う。

「他人となら、家族になれるかもしれないと」
「そういうこと。一億はあきらめるよ」

深く嘆く様子も見せずに、千葉は「じゃあ」と紳士に別れを告げる。

「どこにいかれるのですかな？」
「集金だよ」
「あては有るのですか？」
「なんとかするさ……ちょっと訊くけど、紳士なオジサマがそれを忘れて行って、俺が拾って一割ゲットて言うハッピーエンドは有りますか？」

アタッシュケースを指さして、千葉が少しだけ名残惜しそうにつぶやく。

「ないです」
「さいですか。後、もう一つ質問。俺がボタンていたら……
「差し上げましたよ、一億円」
「いや、そうじゃあなくて」

肩を竦めて、千葉が首を振る。

「あの、ボタンは次、誰が押していたのかな？　っておもってね」
「貴方とは、一切合財無関係な人がですよ」
紳士は邪悪に笑った。千葉は、笑えなかった。

（後書き）

感想はいつでもお待ちしています。

こんなテーマで書いてほしい！　と言う要望があれば、喜んでお答えします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7111m/

一億円の価値

2010年10月8日12時21分発行